

看護系大学での43年間を振り返って

中野 正孝

(元) 鈴鹿医療科学大学 看護学部 特任教授

三重大学名誉教授

寄稿

看護系大学での43年間を振り返って

中野 正孝

(元) 鈴鹿医療科学大学 看護学部 特任教授
三重大学名誉教授

キーワード： 公衆衛生学，疫学，統計教育，データサイエンス，看護教育

要旨

私は、2020年3月31日に鈴鹿医科科学大学を退職しました。そこで、3つの看護系大学で40年以上実践してきた教育及び研究の一部を紹介しました。本学での5年間の在職中に、わが国の統計教育の現状と課題を検討するとともに、看護系大学院における統計教育のあり方と方法、そしてオンラインビデオを使用した視覚的な統合学習支援システムを提案しました。

この度、2020年3月31日付けをもって鈴鹿医療科学大学を退職しました。三重大学医学部看護学科より2015年4月に着任しましたので、在籍したのは僅か5年でした。

私と看護との関わりは、1975年4月に千葉大学に国立大学では唯一の看護学部が設置されたことに始まります。当時、私は看護とは直接関係のない分野で研究を行っていましたが、1977年に千葉大学看護学部の基礎保健学講座に着任することになりました。基礎保健学講座は、保健師活動の基礎となる疫学、保健統計学、環境保健学等を担当する講座であり、主たる研究テーマは循環器病の疫学、生活習慣病と健康管理、環境保健等でした。当時、看護研究においても、疫学、統計学や情報科学の知識・技術が必要になってきました。すなわち、現在話題となっているヘルスデータサイエンスの基本を担うことを求められることにもなりました。そこで、データ解析に関する講演、統計学の教科書や参考書の出版だけでなく、わが国ではじめて看護学生用の情報科学の教科書も編纂しました。さらに、看護学生用の公衆衛生学の教科書も分担執筆しました。当初は2〜3年のお手伝いのつもりでしたが、請われるままに40年以上も看護学系大学に関わることになりました。

私が、千葉大学看護学部に着任した当時は、4年生看護系大学は全国で僅か4校でありましたが、その後、4年生看護大学への改組や新設が盛んとなり、複数の大学から就任要請がありました。特に、三重大学の当時の医学部長と医療短期大学部長から熱心なお誘いがあり、三重大学に就任することになりました。三重大学医学部看護学科は1997年9月に設置されましたが、私は、地域保健・疫学、保健統計学、保健情報学等の授業担当のため、学年進行に沿って1999年4月に地域看護学講座に着任しました。前任校の千葉大学看護学部は小講座が母体となり大講座制に移行しましたが、三重大学医学部看護学科は当初から大講座制であり、担当科目はほぼ一人で対応することになりました。着任当初の研究は千葉大学時代の仕事を引き続き行っていましたが、徐々に三重県や市町村の保健師や保健担当者の方々と仕事を増やす機会が増え、地域保健活動に関する講演等の講師、

様々な委員会の委員や委員長等を務めることになりました。特に健康日本21の三重県版である「ヘルシーピープルみえ・21推進ネットワーク会議」に参加し、三重県や市町村の健康づくり活動に協力したことは、疫学調査や統計解析だけではなく、保健施策の策定、実際の活動の展開まで、一貫した保健活動を行う機会が得られ、貴重な経験となりました。そして、三重県や市町村の受託研究等のデータ解析の結果の報告書の作成等に多数関わりました。さらに、科研費の助成を受け、看護統計教育や看護CBT等に関する研究も行いました。医学科や他学部の先生方からご指導・ご鞭撻をいただきながら、共同研究も多数進めました。2012年11月には、第22回日本健康医学会総会・学術集会を、三重大学を会場として主催し、健康医学における新たな実践の展開に資することができたと自負しています。

2013年3月に定年を迎え、2013年4月には三重大学名誉教授の称号もいただき、引き続き2013年4月より2015年3月まで特任教授として2年間勤務することになりました。したがって、三重大学には16年間にわたり在職しました。

その後、鈴鹿医療科学大学看護学部の創設に関わることになり、2015年4月1日に看護学部に着任しました。主として公衆衛生疫学・保健情報統計学等の教育・研究を担当することになり、引き続き看護におけるヘルスデータサイエンスに関する教育・研究に携わることになりました。それまで、学生時代から長きにわたって国立系大学の環境に馴染んできましたので、独自の建学の背景や理念を有する私学の創設看護学部の環境に慣れるのにいささか時間を要しましたが、新たな貴重な経験となりました。

教育や指導方法について新たな工夫をしました。たとえば、ICTをベースに「覚える統計学」から「調べる統計学」へという方針を、これまで以上に強化するとともに、独自のマークシート方式を導入し、苦手意識の高い統計学の学習支援に活用しました。さらに、2016年には教科書として全面改訂した「最新保健学—公衆衛生・疫学」を編集・執筆しました。ゼミの学生に対しても、ひとり一人の学生の特性に応じ、興味や知識を考慮した個別指導

を徹底し、全ての学生が納得のいく内容で卒業課題に取り組み、卒業後の看護活動に活かせるような業績にすることができたと考えます。大学院生の看護研究の授業では、ヘルスデータサイエンスの基礎を学習できるように配慮し、大学院生自からがデータを収集し、統計ソフトを活用した授業を進めたところ、その分析結果をみた大学院生達が「統計学は役にたつ、面白い」等と非常に感動してくれたことが印象的でした。委員会活動の一つとして、看護学部広報委員会委員長を5年間勤めました。多くの方々のご協力をいただき、盛況なオープンキャンパスを継続して開催できました。さらに、保護者との懇談では、限られた時間ではありましたが、心行くまで話し合い、率直な意見やご要望をいただき、学生指導に活かすことができました。

研究活動では、三重大大学の退職時に申請した科研費（研究課題名：看護系大学院生のための英語論文作成用統計教育及び視覚的統合学習支援システムの検討）が採択され、鈴鹿医療科学大学において研究を進めることになりました。着任したばかりで研究体制や学内の先生方との連携が構築されていなかったもので、当初は苦戦しましたが、他の施設の共同研究者の協力を得て、統計教育の現状と課題を明らかにし、それらの知見に基づき、看護系大学院における統計教育のあり方と方法及びオンラインビデオを用いた視覚的統合学習支援システムを提案することができました。さらに、他の科研費においても、研究分担者として家庭訪問記録の電子化にも取り組むことができ、現在もこれらの研究を継続しています。

一方、心残りもあります。その一つが、在職中にフェイクニュースのようなメールが流され、非常に困惑したことがありました。身に覚えのない内容なので、不問に付しましたが、最近話題となっているネットによる誹謗中傷事件には根深い問題があり、情報科学教育に携わる者の一人として、多角的視点から検証すべきでした。二つ目は、2019年9月に大学の要請で、看護学部からIR推進

室に配置換えになったことは、退職を控えた私には想いも寄らない出来事でした。本学のIRに関して発言は控えますが、一事例として大学におけるIRの課題と展望について考究することができ、今後の活動や提言に活かしたいと考えています。三つ目は、感染症対策です。疫学に携わる者として、折に触れ「21世紀は『感染症との戦いの世紀』である」と指摘してきました（たとえば、看護研究, 34(1), 2001)。昨年度よりCOVID-19が世界を震撼させており、半年以上経過した現在でも収束の目処は立っていません。報道されているように、わが国では政府の対策には信頼がなく迷走しておりますが、国民の叡智と行動に支えられ、何とか壊滅的な状況には至っていないのが実状です。一研究者として、感染症対策に向けた危機管理の調査研究やデータ解析等を怠ってきたことが悔やまれ、猛省しています。

COVID-19による社会の混乱は、大学の教育・研究にも多大の影響を及ぼしています。さらに、昨今の教育現場は、実学至上主義の台頭、教員の自主性があまり尊重されなくなってきた等、大学をとりまく教育・研究環境は様変わりし、大学を去る者として憂慮すべきことが多々あることが気がかりです。最後に、短い期間ではありましたが、お世話になった教職員の皆様に感謝するとともに、ご健勝とご活躍をお祈りしております。

— プロフィール —

中野 正孝 元鈴鹿医療科学大学看護学部特任教授、三重大学名誉教授 医学博士

〔経歴〕1976年千葉大学大学院工学研究科修士課程修了、1977年千葉大学看護学部助手、1987年同看護学部助教授、1999年三重大学医学部（看護学科）教授、2015年鈴鹿医療科学大学看護学部特任教授、2020年同退職。
〔専門〕公衆衛生学、疫学、保健統計学、保健情報学。

Looking back on forty-three years at university nursing programs

Masataka NAKANO

(former) Professor, Faculty of Nursing, Suzuka University of Medical Science
Professor Emeritus, Mie University

Key words: public health, epidemiology, statistic education, data science, nursing education

Abstract

I retired from Suzuka University of Medical Science (SUMS) on March 31, 2020. In this essay, I introduced some of the education and the research that I practiced at nursing programs in three universities over the past 40 plus years. In the five years I worked for SUMS, I examined the current situation and problems of statistic education in Japan. I also proposed guidelines and methods for statistics education in graduate schools of nursing and presented a visually-integrated learning support system using online videos.